

## ご 挨拶

デジタルテクノロジーを利用した、インターネットの環境は、人と社会に貢献するために作られています。1980年代から、いわば、実験として運用されてきたインターネットは、機能としても規模としても、本当に社会の基盤としての役割を期待されるようになりました。こうした期待に応えるように、インターネット技術の開発は着々と進んでいます。「次世代インターネット」と呼ばれる一連の技術は、インターネットがより広い守備範囲を持ち、より汎用のコミュニケーション基盤としての役割を果たすように開発作業が進められています。

実際の社会でも、このような技術に沿った試行がどんどん行われ、その結果の中には、実用やビジネスとして、新しい社会の機能として定着しはじめたものも少なくありません。マスコミや子供の間でもインターネットは日常に溶け込んだ感があります。こうして、私たちの生活と社会が、インターネットにすっかり体重をかけはじめたとき、取り組まなければならない沢山の課題が発生してきます。

もしもの時に機能するのか、子供は安全か、置いてきぼりはつくっていないか、信頼性があるのか、社会やコミュニティはかわるのか、理解は充分か、新しいルールが必要なのか、日本は大丈夫か。これらの課題を解決するためには、さまざまな社会のエキスパートと、テクノロジーの専門家が、広く知識を共有し、力を合わせる必要があります。

1990年に開設した慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス(SFC)は、創設当時からこうした課題に分野を越えたコラボレーションで挑戦しつづけてきたキャンパスです。そして、1998年度は、創設時に一年生として入学した学生が、博士号を取得して社会に巣立つ、大学の「完成年度」でもあります。この年度に、私たちは、キャンパスの大学院、政策・メディア研究科の森泰吉郎記念研究振興基金重点指定研究プロジェクトとして、分野の異なる学生と教員が力を合わせ、「政策・メディア21」と題した研究活動を行ってきました。本シンポジウムは、私たちの一年間の活動の締めくくりとし、私たちの研究成果を一人でも多くの方と共有することを目的として企画いたしました。

研究活動と本シンポジウムの企画のほとんどは、大学院(と一部学部)の学生によって行われました。十分なスペースと洗練された準備は用意できなかったかもしれませんが、その熱意とエネルギーが、本日のシンポジウムでの実りある議論を生み出すことでしょう。お忙しい中、参加していただいたみなさんに心から感謝するとともに、今日の議論を出発点とした新しい挑戦へのお付き合いをお願いし、ご挨拶の言葉とさせていただきます。

政策・メディア21プロジェクトを代表して

村井 純

1999年2月25日